

國學院大學學術情報リポジトリ

内なるココロを表出する：段注の「[シ]」を中心に

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大橋, 由美, Ohashi, Yumi メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000219

内なるココロを表出する

— 段注の「詁」を中心に —

はじめに

中国語の理解に洞察が欠かせないとは、例えば初修時であれ、一つの「在」でも言葉としての力強さの違いを文字として見える形では書き分けないことを知った場合に、気づくかもしれない。読む者の理解により委ねられる長く複雑な文章や古典の場合には、洞察は一層重要であることも周知のことであろう。これは、中国語は、形を与えられた表記言語であるモジの漢字のみを用いる孤立語であることに関係があるといえよう。

大橋由美

孤立語である中国語のモジは、この世の全てを書き表わす手段として創られた漢字以外にはない。その漢字の三属性とは一音節が一語（ことば）で一字、わずか一音節であっても一つのことばであり、それが一つの形で以て書き表わされることをいう。基本的に大きな特性というべきである。

そもそも、意思の伝達手段であることばの基本（単純容易）は音声によるものであり、表記によるもの（文字）に先立つ優位性がある。文字は、音声言語のことばと異なり、表記法を学んで初めて可能になる伝達手段である。文字で表現することは難しく、的確に表記できるよう訓練が必要で、実際そのことば

の意味を真に理解するに至るには更に時間を要すかもしれない。しかし、一旦習得すれば、僅かな文字数で簡潔に的確に表現者の意図を表わせ、また読みとれる。

このように、難解であり且つ優れることが特に顕著と思われるのは古典に於いてである。古典では所謂実辞を多く用い力強く、明瞭簡潔な表現がなされるが、単なるその連続体ではなく、起伏がある。孤立的な性格の言語では、他の語との関係を示す必要上、自然そのための道具が求められるからだ。事実、表現上、的確なリズムを作り出すのは、その間に適宜（最少限かもしれない）挟み込まれた所謂助詞などの働きによる。多用は詩歌を収めた『詩経』に限らない。意味機能のみならず表現上でも起伏や強弱を付けることは、達意の文を可能にする重要な条件ゆえ、所謂経書にあつては重要であり顕著といえる。読む者の思考に切れ目を教えることは、孤立語で語の表記にも活用変化のない中国語にあつては、極めて重要である。洞察を的確且つ迅速に効有るように果たす上で、謂わば必要から自然に発生したのであろう所謂助詞の類は、どのように創り出され、その後どう使われてきたか、これについて考えることは、多様さを想えば困難を伴うが、興味あることである。

さて、単に伝説として軽々に棄て去ることができない古書以来の伝えを残すとの論も成り立ちうる許慎『説文解字』（説文と略す）の敘にみえる造字の動機から、意味のないことばは造られなかったはずといえよう。ココロにある思いを音声として口から発し、それを形ある言葉にして、記録する（消え去る音声ではなく形にして残す）という使命を果たすためにモジは造られた。目に見えるその形には残すべしとして用いたひとのココロが籠められている、意味がある、と受け止めるのが自然ではなからうか。漢字の三属性から無意味なモジはなく、必ずひとはそのモジに意味を込め伝えたのであるから、助詞の類でさえ例外ではないだろう。何らかのニュアンスを付けたりすることがその機能ゆえ、ことばにならない声のその息遣いを表わすモジが喜怒哀楽や疑問の微妙なニュアンスであるココロを伝えるものと受け止めることは、より深い対象の理解へと繋がる。

このようなことを痛切に自覚し学問的態度として徹底したのが東漢の学問を理想とした清朝の乾隆・嘉慶期の学者たちである。特に古典言語学、すなわち小学・字書の分野で一字一句の意味に拘り根本的且つ精密な研究を通して聖賢の教えを記した経書を正しく理解しようと専心実践した。いまなお高く評価される優れた水準の業績を多く残した歎派一門の学者たちのう

①のように凡例とする以上、段氏は原則を述べるに止める。

⑤ 𠄎與至一也 補足的に転じて、曾てより紛れて用いられた「辭」に言及する。「𠄎」との類似点は「ことば(単字)」となった場合にあるが、元来は異なる(造字の意図、六書)という原則を述べる。決して混同してはならないというのが重要な主張である。³⁾

⑥ 司者至一部 造字法は六書の會意によることをいう説解「从司言」に対する注である。「意」が形となつて外に現れモジとなる以上字形は重要で、出来上がった字形にもその「意」が看て取れるという主張である。⁴⁾

二 段氏が挙げる例について

②と③に挙げられた例について詳細をみる。段注著述の時、即ち清朝に至つて説文研究が専家により為される前には、説文とは宋代の徐鉉(大徐)及び弟である南唐の徐鉉(小徐)が校訂した本^{テキスト}などであった。一般には、大徐の『説文解字十五卷』(宋代奉勅校訂、大徐本)が用いられてきた。段注著述に当たつては、これを修訂し小徐の『説文解字繫傳四十卷』(小徐本)を重用したという。

二——大徐本と段注との比較——②と③の例の場合——

先ず列挙順及び説解を中心に、大徐本と段注との相違をみる。段注では、𠄎及び辭(十四下23a)、また凡例とする𠄎の19例は、多くは大徐本の説解を改めた上で挙げる(末尾の(一)内は唐韻の反切)。大徐の説解は説文に出る順に、以下の如く部首順、部首の特徴を付し示す。なお、親字の①④は段注のA「意」類、1①15は段注のB「言」類、↓のさがが大徐本を改めた段注の説解・詞に引く14例の説解、とする。その下に筆者の補注を小字で記す。

二——重要な手がかりとなる語(大前提)

詞…意内而言外也。从司从言(似茲切)

↓𠄎…意内而言外也。从司言(似茲切)

辭…訟也。从𠄎、𠄎猶理辜也。𠄎、理也。

重文𠄎…𠄎文辭从司(似茲切) 文六 重三

↓説也。从𠄎辛、𠄎辛猶理辜也。𠄎、理也。

𠄎 𠄎文辭、从司。

大徐が「訟^{あひそぐ}也」とする字義を誤りとして「釋也」と正す

のは、説の説解に拠る。そもそも、その根拠である造字法に

については、大徐に欠けている構成要素の一つである「辛」を補い、会意（从𠂔辛）とするのは「寧を理める」ようなことであるからという。

二一 二 大徐の例と段氏の校訂

二上 1 b（八部・气ガワカレチル）

9 𠂔之必然也。从八一八。八象气之分散（兒氏切）

↓ 𠂔之必然也。从八一。象气之分散入聲（兒氏切）

𠂔であり必ず然うであるというのである。八と一とを構成成分としてもつ（分散して真つ直ぐ進みゆく）。気の分散して入る聲に象る。

7 曾…詞之舒也。从八从曰、𠂔聲（昨稜切）

↓ 𠂔之舒也。从八从曰、𠂔聲（作稜切）

𠂔であり舒びるのである。八（散りひろがる）を構成成分としてもち曰（いう）を構成成分としてもつ。

昨 𠂔 齒頭音從母・全濁 ↓ 作 𠂔 同精母・全清（類似的字体の誤りを正す）

四上 8 b（白 𠂔 鼻・イウ）

3 皆…俱詞也。从比从白（古諸切）

↓ 俱𠂔也。从比从白（古諸切）

俱にというときの𠂔である。比（ならぶ）を構成成分としてもち白（鼻・息が出る）を構成成分としてもつ。

5 魯…鈍詞也。从白 𠂔 省聲。論語曰參也魯（郎古切）

↓ 鈍𠂔也。从白 𠂔 省聲。論語曰「參也魯」（郎古切）

鈍いというばあいの𠂔である。白（鼻・息が出る）を構成成分としてもち、𠂔（段氏5部）がその発音。論語曰「參也魯」（郎古切 𠂔 段氏5部であるから）。

𠂔は「側下切。17部。俗作𠂔」であるから合わない。

2 者…別事詞也。从白 𠂔 聲。𠂔 古文旅字（之也切）

↓ 別事詞也。从白 𠂔 聲。𠂔 古文旅（之也切） 古音在5部

讀若煮 𠂔 章與切・5

十二篇のものは「从𠂔。象形。𠂔亦聲」であり、「𠂔亦聲」について段氏は「故其字在十六十七部之間也。余者切。玉篇余爾切。」として大徐の「象形。羊者切」を改める。相違は、聲母は共に章聲（正齒音・全清）であるから、韻母である。也は上聲35「馬」、與は上平9「魚」、上聲8「語」、去聲9「御」。韻母はともに上聲とすると、也は上聲35「馬」（ヤ・羊者切）、段氏16・17部の間、與は上聲08「語」（ギョ・魚巨切）、段氏5部であるから、5部の「者」の諧聲符に改めた。

4 𠂔…詞也。从白𠂔聲。𠂔與𠂔同。虞書帝曰𠂔咨（直由切）。

↓𠂔也（実は「誰𠂔也」にすべき）。从白𠂔聲。𠂔與𠂔同。

虞（実は「唐」にすべき）書曰帝曰𠂔咨

ここはやや修正の必要性程度が弱く、説解を直ちに校訂せず、段注にて二カ所言及する。𠂔に改めただけでは字義が不十分ゆえ、どのような𠂔であるか証拠を挙げて、「人を尋ねるコトバ」が義と説く。

説解で屡見える「虞書」は「唐書」であるべきとは、凡例として精しく説く「棋」字下を参照すべきとし、ここでは単に「唐」とすべきと述べるのみ。

6 𠂔…識詞也。从白从于从知（知義切）

↓識𠂔也。从白于知（実は「从白于知、知亦聲」）

重文一…𠂔古文𠂔

説解では、頼惟勤氏の所謂B型の會意をA型の三字會意と改める（即ち「知ることについて白う」が、段注では更に「从白于知、知亦聲」として、會意兼形声と説く。

𠂔（知義切）は段氏16部、知（五下25b）は「陟离切・16部」で、同部ゆえ成り立つ。

五上12b（乃部・气ガ出難イ）

8 乃…曳詞之難也。象气之出難。凡乃之屬皆从乃（奴亥切）

↓曳𠂔之難（実は「者」であるべき）也。象气之出難（也）。凡乃之屬皆从乃。

仮りにいえば、形容詞でなく、名詞であることをいう。

五上13b（兮部・气が越えて于がる）

12 𠂔…驚辭也。从兮句聲（思允切）

𠂔 𠂔、或从心。

↓𠂔…驚𠂔也。从兮句聲（思允切）

辭と𠂔が混同されていると考える段氏は、丁寧に校訂する。ここも、語詞であるべきとし、それが親字の本義（用法）とするために、𠂔の説解を説の根拠として挙げる。

五下9b（矢部・真直ぐにゆく）

11 𠂔…況也。詞也。从矢引省聲。从矢取詞之所之如矢也（式忍切）

忍切）

↓況𠂔也（実は「兄𠂔也」であるべき）。从矢引省聲。

从矢、取𠂔之所之如矢也。

10 矣…語已詞也。从矢以聲（于已切）

↓語已言也。从矢目聲（于已切）

八上10 a（人部・ヒトの活動） 八篇は全体にヒト関連（行動など）

④ 然…意臚也。从人然聲（人善切）

一切改めないが、「當作臚意」と注する。

八上17 a（侏部・オオクノヒト）

15 泉…眾詞與也。从侏自聲。

虞書曰泉咎繇（其翼切）

↓眾與言也。从侏自聲。虞書（実は「唐」にすべき）曰泉

咎繇。（其翼切 実は「当然翼は泊⁺（オヨブ）に作るべき」）。

虞書は唐書であるべきとは簡単に述べる（棋下に詳説ゆえ）。泉

は段氏15部、大徐の反切下字翼（八篇）は「从北。異聲。凡利切。

古音在「部」ゆえ、泊（十一篇上）「从水。自聲。其翼切。按當依

釋文其器反。十五部」とし、同じ「翼」であっても改めるべきとする。

八下10 a（欠部・アクビ・息の出入りや口の動き）

① 𦣻…言意也。从欠从直、直亦聲。讀若酉^{ヨウ}（與久切）改めない。

③ 𦣻…悲意。从欠𦣻（シヨク・シキ）聲（火力切）

↓悲意（実は「小怖也」とすべき）。从欠𦣻聲（所力切）

ここは字義と発音の混乱がある。諸書を併せて攷えたという。「悲意」と「火力切」は、今は奪するが本来はこの字の下（次）にあるべき歟字のものと説く。

② 𦣻…咄𦣻無慙。一曰無腸意。从欠出聲。讀若弁⁺（丑律切）

↓咄𦣻、無慙。一曰無腸意。从欠出聲。讀若中。

1 𦣻…詮詞也。从欠从日、日亦聲。詩曰吹求厥寧（余律切）

↓詮詞也。从欠日、日亦聲。詩曰吹求厥寧。

从A从B型でなく、从AB型で文として成立する（＝口を開けていう）よう解する會意と説く。

八下12 a（无部・欠の反転形。息がつまる）

13 𦣻…𦣻惡驚詞也。从无𦣻聲。讀若楚人名多夥（カ・ワ）（孚

果切）

↓𦣻惡驚言也。从无𦣻聲。讀若楚人名多夥（孚果切）

9上15b (鬼部・死んだヒト)

嬾…見鬼驚詞。从鬼難省聲。讀若詩受福不儼 (ダ) (諾何切)

↓見鬼驚詈。从鬼難省聲。讀若詩受福不儼。

二二 段氏の例の特徴—②と③の例から—

二一を大前提とし段注の各字についてどの点を改めたかに焦点を絞って詳説する。この修正点及びここでの説が、段玉裁の虚辞と助辞に対する考え方、助辞説ではないかと考える。

二二 段説の理解Ⅱ基本的な考えの実例

「意」と「言」との例を、段注が挙げる順に見る。

二二 二一 A 「意」類 (上述の①～④を付す)

① 歔…言意也…ココロを口にする。

② 歔…咄歔、無慙。一日無腸意。心がないかのようなのである。

恥知らずともいう。

③ 歔…「小怖也」(「悲意」ではない) ちよつと怖がる (「悲しい気持である」ではない)。

④ 然…意臚也 (當作「臚意也」) ココロ (気) が弱い (当然)

「よわいココロである」であるべき)。

①が「ココロを表に出す (口にする)」と強い意志をいい総論的である。以下は「欠」部に属するのでその口にする動機である「意」の相違で、積極性・大胆さに始まる。(極端な場合は、恥知らずとも思えるほど) 口にしたいという強いココロに動かされるということかもしれない。次に消極的となり、怖気づき弱気となり、「人」部に終わる。人のそのココロが失せるのではないかと思わせる。なお、④の次に段注で配される便是「弱也」で原則通りに字義の連関が認められるので、「臚意」に当然、作るべきというのかもしれない。またここでは「意者、志也」と言う。⁵⁾

二二 二二 B 「言」類 (上述の1～15の番号を付す)

B 「言」類は、A 「意」類に関係が深い欠部の吹から始まる。

1 吹…詮言也 詳細に解明することという (ときのことば)。

段氏は、詩経に見える吹は聿・通・曰の正字と注するので、「のべる」。また以下にのべることをいい起すことばと解すと考えられる。

2 者…別事言也 事を分かち (者字以下で明らかにして) 示

す（というときのことば）

3 皆…俱言也（他におなじようなことがあると） 続べま

める（というときのことば）

4 躊…言也（実は「誰言也」） 誰（疑問のことば）⁶

5 魯…鈍言也 樸 鈍さ（をいうときのことば）^{すなわでにふい}

「国に山水が多く、（それで）人々の性質が樸鈍である」（「釋名」）と風土や土地柄の特質としてあり得ることを以て注す（能力知力のそれではない）。

6 觥…識言也 知ることば

しる程度がすばやく賢いので、ことばを口から矢のように速く発する。内なるココロで認識することが速い（ので口から速く発する）⁷

7 曾…言之舒也 ことばの舒びひろがりゆるむさま

「曾之言乃也」といい古訓は乃。曾經は今義で、本来は曾孫のように「曾層益疊」、つまり重なる・ます意であると説く。ゆえに8乃が続いて配される。また嘗のようではあるが、「絶非語氣」といい、実質的な意味をもつという。

8 乃…曳言之難也 ことばを曳くことが難しいさま

汝・如・若などと同じ（一語之転）で曳きのばすが矯める場合がある、つまりことばを伸ばして転じることをいうが、それが難し

いさまをいう。

9 尔…言之必然也 ことばの必然的であるさま（そのようである）

「尔之言如此」と説く。単独の此、或いは爾と訓じることもあるが、「語助有用耳者、與爾絶殊。…耳之言而已ノミ也」といい、近ごろの人は爾と耳を区別しないという。「必ず然うである」意を表わすというが、限定的な働きと解しても文末のノミは除くということである。

10 矣…語已言也 ココロが已み（連れて已む）そのときのコトバ

11 弥…兄言也 増益するときのコトバ

コトバを付け足し益すつもりときのコトバで、段氏当時も既にこのように用いると注をする。

12 粲…驚言也 驚くココロをコトバにすると粲である。

13 𪔐（重文は「从心」） 驚き懼れるココロを表わすとする

14 𪔐…𪔐惡驚言也 惡むことに遭い驚駭くコトバ（カと発音）

例えば、鬼（亡くなったヒト・この世のものでない）を見て驚駭いたとき（がそうだが）は、次の例の14 𪔐である。假借して𪔐（音はカ、ワザワイ）とする。13と14は字義の関連によつて配列。

14 蟻・並鬼警冑也 鬼を見れば驚駭く。そのときのコトバが蟻である

蟻は奈何の合聲（音はナ。ナゼダ、理解できない）である。凡そ驚いたときのコトバは「那」であり、これが他ならぬ蟻であるとい⁽⁸⁾う。

15 泉・衆與冑也 多くの者が與わるといふコトバ

コトバの使命はココロを可能な限り表わす点にあるゆえ、『詩経』に見える由緒正しい1吹（詳細に説明することを用いことば・言い始めること）から始まり、ココロを表現する様々な場面（表出によって知られるココロの諸相）ごとに、それを表わすのにふさわしいコトバを挙げてゆく。

1を受けその述べ方として、先ず清朝の学者というべく達意の表現に関わる2者（事を分かち以下で明らかにして示す）を出し、次にはその対にある3皆（他におなじようなことがあると統べる）を置く。

続いて、達意を理想とすれば不明なことは質すので4躊（誰・問うことば）となるのであろうか。また5魯（樸鈍な人）、つまり「分らない」と対と見なせる6飢（知る）に先立ち、識（三上12b）との関連を説いて、「意也」と結びつけ

る。ここまでは、説解に「○冑也（○をいうときのコトバ）」とある系統で、以下に一旦9まで「冑之○也（何かをいうのに使うコトバの状態など）」が続き、再び10から「○冑也」に戻る。

7曾（ことばの舒びひろがりゆるむさま）とは同じ「曳く」用法だが差異（つまり析言・統言に相当）のある8乃（ことばを曳くことが難しい）に続き、9尔（ことばの必然的であるさま・そのようである）と並ぶ。

再び次に「○冑也（○をいうときのコトバ）」型に戻るが、やや前の場合と異なる。具体的な「ココロ」の表明を主目的とするというより、寧ろココロがどう感じたかというような何がしかのニュアンスを示すといえるだろう。

先ずコトバを切るときで、それに対するさらに加添するときのコトバが続く。10矣（ココロが已むに連れてコトバが已むときのそのコトバ）と11張（コトバを付け足し益すつものときのコトバ）である。

最後におかれたまとまりは、以上が具体的或いは実態がみえないニュアンスとしてのココロの表出であつても、ある意味で通常の言語表現の場面で使われると考えられる。しかしこの一系統は、それ以外で使用場面は限られる特殊の状況にあり、そ

の典型は神鬼に対したときの人のココロを表わすコトバといえるだろう。13と14は一般的か特殊な状況下（儀式）かの違いがあるが、「驚き発する」という共通の字義の関連がある。多くのものに関わることをいう『書』（唐書）に見える15で結ぶ。

12 咍（驚くココロをコトバにする・驚き懼れるココロを表わす）、13 𪔐（悪むことに遭い驚駭くコトバ）、14 𪔐（鬼を見て驚駭き発するときのコトバ）、15 𪔐（多くが與わるときのコトバ）。

B「𪔐」類は、A「意」類を受けた具体的なコトバが、段氏のコトバの差異に対する細やかな感覚が察せられるように配列されたと思なせよう。その流れは1（欠部）に始まり15（依部）に終わる。ココロもコトバもヒトに深くかわかることは疑いない。元よりA「意」類は全てヒトに関する部首が多く連なる八篇にのみあり、B「𪔐」類では最後にまとめて置かれたもの（特殊な状況）が八篇やヒトに関する部首に属す。

三 おわりに―段氏独得の説として―

段注は、許慎の時代にみられた説文の九三三三字について、

各文字が持つ漢字の三属性について用法も併せ、逐一解釈したものである。西暦一〇〇年当時、コトバでありモジとなつて見ることができたものに施されている。段玉裁の当時に至つては、経書などに残るものではあつても、果たして如何であつたろうか。一五〇〇年以上隔たり、社会の変化に伴つたコトバの変遷は大きいはずである。音（声）と形の隔たりが大きいだけでなく、その隔たりを反映して形が変化し、形が変わると義がさらにその形に合つたものに変わることはよくあるとは段氏が随所で述べることである。

例えば、11 𪔐で「今俗所云已如是（今俗にいうところは已にこのようだ）」とあるように、注をする場合に屢しば段氏が生きた当時の俗語や方言を引いて説文の説くところの証拠とする。解説すべき当該字が経書類に見えない場合に証拠として用いることが多いが、身近に今なお生きる古語として分かり易い解説となるともいえる。⁹⁾ 本小稿で、段氏がA類とB類とで挙げた例は、確かに説文に収められた由緒正しきモジではあるが、既に経書類に見えないものも少なくない。必ずしも常用・実用とは限らない。韻書や義書、他の字書類にのみであれ残つていれば証拠とすることはできるが、最早解釈困難なモジというべきかもしれない。また、助辞について專著を著わす場合は、著

述の動機として、理解が容易でない助辞のその意味と用法を説き使う者に益するようという配慮が必ずあり、それが重要であるとは想像できる。しかし、段注では、仮に助辞に関心があっても、そのような選択的に説くべき助辞相当のみを特に取り上げて対象とすることはできなかったはずである。好むと好まざるとに関わらず、説文に見える文字には注をせねばならない。その文字のところまで注するに至り出くわしたときには、正面から取り組むのが執筆上の基本姿勢である。解説(注)し難い文字が助辞などであっても、避けられない。読む者もまた必要に応じてその字(のみ)を引くのが、このような書の用い方の一般であらう。

しかし、その文字は必要があつて創造され使われてきたのであるから、説文一書がコトバの全世界を説くのであれば、冒助辞類もまた、その世界を構成する部分であらう。世界全体とのかかわりが認められ、またそうであるように全体を考慮して注を整えるのが、段氏の基本的な著述態度と考える。

ゆえに、二で述べたように、段氏は先ず「意」即ちココロとしては表出しようとする強さの程度(ココロの状態)を前提として示した。B冒助辞類では、相互の連関を考え(段氏の理解する説文の執筆法に拠る)、冒助辞類の全体の世界を示唆する

ように整え注の一部としたといえまいか。少なくともこの点に、段氏に専著がなくとも、独得の考えがあつたのではないかと察するのである。

さらにまた、専著のように限られたモジのみを(特定し)対象とするのではないので、寧ろ段氏冒助辞説は、より広がりのある助辞論ともいえるのではないだろうか。曾字下というように、所謂虚字なども含まれるようにみえる。体系的に端的な表現でまとめられたとは言い難くみえ、筆者には判然としない点もあるが、試みに以下にどのような具体的特徴が今日的にみて認められるかを述べ、本小稿のまとめとする。¹⁰⁾

- 1 吹…詮冒 ここに・これ (上の文を承け) 下の文を言い起すことば (発語)
- 2 者…別事冒 ことを別つ。
上にのべることに付し(一旦停頓)、専ら下のことであることを指す(語氣)
- 3 皆…俱冒 すべて具わる(副詞、総括)
- 4 嚙…冒也 疑問
- 5 魯…鈍冒 ニブイ(形容詞)
- 6 飢…識冒 認識が速く口から素早く発する(動詞)
- 7 曾…冒之舒也 コトバで延び広げて重ねる(副詞、加添)

8 乃…詈之難也 コトバで曳く（副詞・動詞・接統詞、嬌める・転じる）

9 尔…詈之必然也 このようである

10 矣…語已詈 コトバが終わることを示す

11 弥…兄詈 増益すコトバ

12 哿…驚詈 驚くときのコトバ

13 鴆…弟惡驚詈也 惡むべきことに遭遇して驚くときのコトバ

バ

14 蟻…弟鬼警詈 追儼のときに発するコトバ

15 泉…眾與詈 衆く（の人）に関連するといふときのコトバ

（1）注

所謂助詞（助辞とも）及び虚詞（虚辞とも）について、実字（実詞・実辞とも）に比して一般的には以下のようにいえるだろう。

助詞は虚詞と関係し、実字に対する表現である。実字がそれ自体何らかの観念を表わすとするれば、虚詞などはそれ自体では何ら特定の観念を想起させない語、と理解できる。軽く、弱い、コトバに過ぎない。しかし、直截に表現し難い「何らかのニュアンス」を表わすことが、他の語（実辞）と併せて補助的に使われ初めて可能となる。それ自体が本来持つ意味より機能によって生き多様に活躍（用法）する助詞類は、多彩で使用範囲が広いのである。現代的ながら一先ずこれを概説的な助詞説として参照しつつ、本稿では段注がその用法を経書類

（2）

① 詈 詈 九上29b（司部一字目）

② 意内而言外也。

③ 有是意於内、因有是言於外謂之詈。此語爲全書之凡例。
④ 全書有言意者。如歎言意、歎無腸意、歎悲意、然臆意之類、是也。

⑤ 有言詈者。如吹諍詈也、者別事詈也、皆俱詈也、嬌詈也、魯鈍詈也、慚識詈也、曾詈之舒也、乃詈之難也、余詈之必然也、矣語已詈也、弥兄詈也、哿驚詈也、鴆弟惡驚詈也、蟻弟鬼警詈也、泉衆與詈也之類、是也。

⑥ 意即意内。詈即言外。言意而詈見。言詈而意見。意者、文字之義也。言者、文字之聲也。詈者、文字形聲之合也。凡許之說字義皆意内也。凡許之說形、說聲皆言外也。有義而後有聲。有聲而後有形。造字之本也。形在而聲在焉。形聲在而義在焉。六藝之學也。

⑦ 詈與辛部之辭、其義週別。辭者、說也。从禺辛。禺辛猶理辜。謂文辭足以排難解紛也。然則辭謂篇章也。詈者、意内而言外。从司言。此謂摹繪物狀及發聲助語之文字也。積文字而爲篇章。積而爲辭。孟子曰。不以害辭。不以詈害辭也。孔子曰。言以足志。詈之謂也。文以足言。辭之謂也。大行人故書汁詈命。鄭司農云。詈當爲辭。此二篆之不可混一也。

⑧ 从司言。

⑨ 司者、主也。意主於内而言發於外。故从司言。陸機賦曰。辭呈材以效伎。意司契而爲匠。此字上司下言者、内外之意也。郭忠恕佩觿曰。詞朗之字、是謂釋行。本作詈。李元仲字鑒曰。詞朗崩秋字、說

を中心に古典に求め、逐一文字の成り立ちから用法に個別に解説した説文のいくつかの助詞を具体的にみて、段説の特徴を探ることとする。（三省堂『言語学大辞典 第6巻 術語編』特に、助字・自立語・虚辞の項参照）

文作冒服冒焮。是可證古本不作詞。今各本篆作詞。誤也。似茲切。一部。

① 意内而言外也（内に意^{おも}えば外に向かつて言う）。

② ココロ（表現したい気持ち）が内にあるという場合には、それに因んでコトバ（音声）を外に向かつて発することがあり、これを冒という（これが冒の意味である）。此の語（冒トイウコトバ）は全書の凡例と爲る。

③ ②（説文）全書には「意」と説解に言う場合があるものとは、例えば、猷は「言意」、猷は「無腸意」、猷は「悲意」、猷は「臆意」の類の如きが是れである。

④ ③「冒」と説解に言う場合があるものとは、例えば、猷は「證冒也」、猷は「別事冒也」、猷は「俱冒也」、猷は「冒也」、魯は「鈍冒也」、猷は「識冒也」、曾は「冒之舒也」、乃は「冒之難也」、余は「冒之必然也」、矣は「語已冒也」、殊は「兄冒也」、（句＋兮）は「驚冒也」、猷は「弟惡驚冒也」、猷は「弟鬼警冒也」、猷は「衆與冒也」の類の如きが、是れである。

⑤ ④（この）「意」は他でもなく即り（説解の）「意内」で、「冒」は他でもなく即り「言外」である（意^{おも}うのは即り内にて意^{おも}い、冒^{ちて}は即り外にむかい言^{おも}として言うのである）。意を口にすれば（つまり冒^{ちて}が見われ（みえ）る。冒を口にし外に向い言え（内なる）意が見われる。

⑥ 意^{おも}というものは、文字の義である。言^{おも}というものは、文字の聲の合^あである。冒（モジ）としてのコトバ^{ちて}というものは、文字・形・凡そ許（慎）の字義を説くのは皆て「意内」である。凡そ許（慎）の形を説き、聲を説くのは、皆に「言外」である。

⑦ 義が有ってそうして後に聲が有る（「意内」があつてその後で「言

外」がある・言いたいことがあつて音声として口に出す）。聲が有ってそうして後に形^{かたち}が有る（発音して後にそれを形にするモジがある。（これが）造字の根源（根本的原因）である。

⑧ 形が存在して聲は焉に存在する。形と聲が存在してそうして義は焉に存在する。六藝の學問（六経、易書詩禮樂春秋）である。

⑨ ⑤ 冒と辛部（十四下23a）の辭とは、其の義は迥別れる。辭なるものとは「説也。从𠂔。𠂔、猶理辜（𠂔辛）を構成成分として持つとは猶と「辜を理さめる」ようだ」である。文辭が（それで）以て難しいことを排除し紛れることを解くに足ることを謂う（意味する）。然うであればそのときは則り辭は篇章（文字・言葉の連続体——文章）を謂うのである。

⑩ 冒なるものとは、「意内而言外。从司言」であるから、此の場合には、物の状態を摹し繪としてえがき發聲助語の文字（広く象形以下創りだされたモジ）にまで及ぶことを謂うのである。

⑪ 文字を積みかさねてそうして篇章（句）と爲る。冒を積みかさねて辭（文章・言語の連続体）と爲る。

⑫ 孟子は（孟子・萬章上）で「不以文害辭。不以冒害辭也（モジをばもつて文章を損なわぬ。コトバをば以て文章全体を損なわぬ）」という。

⑬ 孔子は「言以足志（口に出してそれで以て意図を伝えることができる）」というのは（左傳・襄公二十五年）、「冒」意内言外の謂である。

⑭ 「周禮」「春官宗伯・大祝」「大行人故書計冒命」で「鄭司農云「冒當為辭（鄭司農は「冒は、當然辭に爲るべきだ」という。此こは、二篆の捉^{とら}ぜて一つとしてはならないということである（私の『漢讀考』にもある。

（参考）

・孟子原文 不以文害辭、不以辭害志、以意逆志、是爲得之、如以辭而已矣…モジだけ取って詩句の意味を損なつてはならないし、詩句だけ取って詩の言いたいことを誤つてはならない。詩の言いたいこととの意を汲んで読むことができれば、詩を理解したといえるのだ。

・孔子原文 言以足志、文以足言。不言誰知其志。言之無文、行而不遠…一般的な解釈は「言葉によつて意図が伝わり、文飾によつて言葉が生きる。言葉にしなければ、意図は誰にも伝わらない。言葉にしても文飾がなければ、相手に伝わりはするが印象には残らない。」であらう。

・周礼原文 「大行人故書計詞命作六辭以通上下親疏遠近一日祠」この校勘記には「一日祠諸本同、唐石經缺、漢讀考云「祠當是詞之誤、大行人協辭命注、「故書協辭命」作「計詞命」、鄭司農云「詞當爲辭、元謂辭命六辭之命也」、是故書辭作詞之證」と段氏の説を引く。

① 从司言（言を司る）
司（なるもの）とは、主（つかさどる・専らとする）である。意が内で主りそうして音声言語が外へ発せられるので、故に「从司言（言を司る）」だ。

陸機（西晋二六一—三〇三）は賦（文賦）で「辭呈材以效伎。意司契而爲匠」という。

此の字が司（Ⅱ意Ⅱ内）を上にし言（Ⅱ外）を下にすること（字形）については、内外の意（考え）からである（「意を口にし外へ発する」）。

郭忠恕（宋？—九七七）は『佩觿』（平聲十陽）で「詞・朗の字は、是さに（時代が下った）隸書や行書で、本らには習・艮に作る」という。

李文仲（元、生卒年未詳）は『字鑑』で「詞・朗・崩・秋の字は、

説文（小篆（篆文）では習・艮・𠂔・𠂔に作る）」という。

是れらはまさに古く本らしい詞に作らなかつた證とすることができる。今各本では篆文は詞に作り、誤る。似茲切（シと発音）。一部。

段注は、単にモジの字義や構造を説くだけでなく、創られたモジの用法（注意事項）にまで及ぶ。これは段氏が六書を「文字の造字と用法についての総合的な概念」（十五篇敘）と定義することと関係があるだろう。また、立説の根拠として引かれた『孟子』『萬章上』の孟子のことは、『左傳』『襄公二十五年』に見える孔子のことは、『周禮』『秋官 大行人』は、いずれも「習」に改めた以外、「意」と「言」に関連する重要な語「文」や「志」についても、自説によつて改めた上である（後述）。根拠の徹底した校訂は、周到とはいえるが、独得であるともまたいえるかもしれない。特に経書の『周禮』を最後にし、校訂が多めの『孟子』を先ず引く引用の順は、段氏が「辭」とその他の重要な語との関連の強さを計つたためといえるであらう。

更に、ここで「習」がモジとしてコトバ（辭）と関係するので、コトバの諸相、或いはその働きからみて弱い、所謂「發聲」「助語」に一言触れる。これによつて、「習」には所謂助詞・虚辭との関連があるという段氏の考えが看取される。段氏に助詞についての独自の説があることが想われる。（後述「おわりに」参照）

本来はこの条の段注の初めに述べ、つら「習」で一貫して論じた方がすなりといくだらうが、出たところ、つまり必要な場所述べべるのが通例であるから、ここで触れた。

この「从司言」型は、文章として読めるゆえ「言を司る」と動賓構造と解すべきで、「司」を上部に「言」を下部の字形であるべきと主張する。

文字構成要素のあるべき位置については屢しば触れ、混乱を来した中であつて混乱せず守つた姿を残すものがある事実と言及する。説文

の字体(親字)が諷りとして正す小学の書にそれらがあり、段注では五代の郭忠恕『佩觿』と元の李文仲『字鑑』とは屢しば併せてその根拠とされる。六朝修辭主義文学の先導者として技法を駆使し幅広く創作した陸機『文賦』は、美文形式の優れた文学理論として名高い。

その「辭」と「意」が含まれた段氏引用文は、正しくは「辭程才以效伎、意司契而爲匠」。「呈(きまり)」「材(もと)として利用可能なもの」と改め引くのは説文(本義)によったゆえで、材を呈とし、それで以て伎が効くのが辭であるとする。次いで「意司契而爲匠」で「意」が「契」を「司」ることが匠となる(ココロがコトバやモジを司りそうしてすぐれたものをつくりあげる)という点が、「言」部ではなく「司」部に置かれた「習」の文字要素のあるべき位置の主張へと続く。巧みな展開によりの確に「文賦」を引用、ココロを表に出せば達意の文辭であるべきという段氏の修辭学的な文学論を垣間見る。以上、やや強引に改めて論を進める感もあるが、総じて、段説の根拠、つまり自分の拠り所(正しい根拠の提示)を示し、「習」について基本的なことを網羅的に説き、凡例的な習に付された注に相応しいであろう。⑥が証拠としてあるゆえに、①や②の各例的確さ、及び⑤の主張や発展的に「習」がどこまでを含むかを理解できる構成といえよう。

(5) — 1 意(十下24b)は「志也」①从心音 ③察言而知意也」である。この直前(24b)に置かれた志「意也。从心出、出亦聲」と轉注の関係にあるが、基本的には異なることは『爾雅』のことより明らかである。混同してはならないと説く所以である。

意の①説解下で、「志は即ち識、心が識るところである。意の訓は測度と爲し、記と爲す。」と述べる。この「意」に続き「惜」(意也)を次いで排するので、「意」と轉注の関係の三文字が並ぶが、先頭の「志」において最も詳しい(総論とすれば通常の配列とやや異なる

か)。以下で深く関係するゆえ、関連しても基本義は紛れてはいけないという主張として「識」「志」「知」の段注も見よう。

十下24b 意「志也」①从心音「志である。」

志は他でもなく即り識で、「心所識也(心が識るところ)」。意の訓は測度と爲、記と爲る。測と訓むことについては、『論語』では(意)の文字遣いと意味用法に鑑みて順に「母意、母必」(子罕第九、「不逆詐、不億不信」(憲問第十四)、「億則屢中」(先進第十一)の如くである。其の(イミ)の字では俗に億(入聲24職)に作る。

記と訓むことについては、今人が記憶と云う如うなのが是れであり、其の(イミ)の字では俗に億ヨク(入聲24職)に作る。

『大學』(所謂「格物知至」を説く)に「欲正其心者、先誠其意」と曰うが、誠とは其の心の識る所を實たすことを謂う。(また「所謂誠其意者(母自欺也。如惡惡臭、如好好色、此之謂自謙)で、鄭(玄)は「謙讀爲慊(謙は慊に讀みかえる)」と云うが、慊の意味と発音を一語で言えは「厭(あき足りる・意に適う)」である。按えるに、厭は當然厭に爲るべきである。厭ということについては、「足也(たる)」であるからだ。

① 心と音を構成成分として持つ(心が発言となり現れる)。

會意。於記切(イと発音、去聲7志)。一部。古音は入聲で、於力切(ヨクと発音)。

③ 言を察して而して意図を知る。

音に从う意を説く。

参考(廣韻) 意(志也。又姓。於記切(イ) 四)

入24職 億(念也。於力切(ヨク。十七)・億(十下万日億

又安也 度也。

(5) — 2 十下24b 志「意也。从心出、出亦聲」

① 意である。心と之とを構成成分として持ち（即ち心が之）、之は亦た同時にその発音。

按えるに、この篆文（小篆）は小徐本^{テキスト}にはなく、（載せる）大徐は「意」下（説解）に「志也」ということをばいつて、ここに補い十九文字のひとつとし、原もと「从心之聲」に作った。（私は）今は更にまた二字（文字を改め「之亦」を増し、大徐に依つてここに排した）。

「志」が録されない所^所については、「周禮」（春官宗伯・天星を掌り吉凶を觀る）「保章氏」の（鄭玄は）注で「志古文識（志は古文の識）」というからだ。蓋ん古文は志はあるが識はなく、小篆はといえば乃り識の字があるからだろう。「保章氏」の注で「志古文識」といい、識は「記也」である。（禮記）「哀公問」では注に「志讀為識（志は識に讀みかえる）」という。識は「知也」である。今の識字は、志韻（去聲7志）と識韻（入聲24職）に分けて二つに解すが、而しながら古くは二音に分けないので、この場合は則り二つに解する義もまた同じく通じる。古文は志に作るので、この場合は則り志とは「記也」「知也」である。

惠定宇（棟、一六九七—一七五八BC）は、「九經古義」の「論語」で「（子張第十九）賢者識其大者、蔡邕（一三二）あるいは一三三（一九二BC）『熹平』石經』作志（述而）『多見而識之』、『白虎通』引作志、（傳公二十四年）『左傳』曰『以志吾過』、又曰（昭公四年）『且曰志之』、又曰（昭公十三年）『再聘以志衆』という。さらに又（惠棟の例のほかに）『定公八年』では『吾志其目也』という。『尚書』（盤庚）に「若射之有志」といい、（儀禮）「士喪禮」の「志矢」では（鄭玄は）注して「志猶擬也（志は猶うと擬（ハカル）のようである）」という。

今人は分けて「志向（シ・ムカウ）」は一字、「識記（シキ・シル

ス）」は一字、「知識（チ・シル）」は一字だが、古くはただ一字一音（志）があるだけである。

更にまた「旗幟」はまた同様にほかでもなく即り「識」字を用いる。（この場合は）則りまた同様に「志」字を用いることができる（用いてよい）。

『詩』の序（詩序）に「詩者、志之所之也。在志為志、發言為詩。志之所之不能無言。」という。故に識は言に从う。

「哀公問」注に「志讀為識」ということについては、漢の時代には志と識は已に字を殊にしていたからだ。

許（慎の説文）では心部に志がないことについては、蓋ん其の古文の識に即したのだが而しながら識の下には載せそこねたのであろう。

職吏切（シと発音）。一部。

以上から、「志」は⑤—1「意」の「①志也」より「③」の説明に近いようである。また「志猶擬也」の注から、志は擬ならば度^ドに同じで、つまり「意」と結び付く。巧みである。なお、惠棟の『九經古義』の件は、「志古文識（志は古文の識）」の例とした引用が本文とは異なる。惠棟は『論語』と『左傳』は皆に壁中から出たのでゆえに古文が多い。賈公彦は「古文の文字で志は少ない。意の（イミの）志と記識の（イミの）志は同じ」と述べる。

⑤—3 五下25b 知（①習也）（②从口矢）

① 習である。

白部で「𠄎、識習也。从白、从𠄎、从知」という。按えるに此の「𠄎」の上にはまた同じように當然「識」字があるべきである（つまり「識𠄎也」）。知と𠄎は義が同じなので、故に𠄎は知に作るのだ。

② 口と矢とを構成成分としてもつ。

識りかたが敏いので、故に口より出るものについては矢のように疾

のである。陟离切（チと発音）。十六部。

(5) 4 三上12b 識「一常也」①一曰知也 ③从言戠聲「

① 常である。

「常」は當然「意」と爲べきであり、字の誤である。草書体では常と意は相いに似る。六朝では草体をば以てて寫書した。草体に迫んで眞を変えられたのだ。諺誤とは往往に於て此の如うだ。「意」ということについては、「志也」で、志ということについては、心が之く所である。意と志と、志と識と、古くは皆て通用した。心の存る所はこれを意と謂う。所謂「知識」ということについては此である。『大學』の「誠其意（其の意を識にする）」は、他でもない即り其の識ることを實たすということである。

② 一いは知と曰う。

矢部に知は「識習也」という。按えるに凡そ知識（シルの識、シキ・シヨク、入聲貫職切）、記識（シルス・オボエルの識、シ 去聲・職吏切）、標識（シルシの識、シ）は、今人は入（24職・去（7志）二聲に分け（意味をその発音に負わせ）るが、古には入・去の分別は無かつたので、三者は實は一義である。

③ 言を構成成分としてもち識がその発音。賞職切（シヨクと発音）。一部。

参考（廣韻）：識（去聲7志 職吏切・シ） 標識。見禮。本音式

識（入聲24職） 說文云、常也。一曰知也。賞職切（シヨク）

十

(6) この字の段注にも「某習」という字の例を挙げる。当該15字と異なるものに「習」「出氣習」、各「異習也」があり、拙稿の補足となる。これらの「某習」類の例を挙げるのは、そのパターンから、そもそも習ではなく「辭」のそれであるからである。段氏は紛れてはいけないものと他の字下で説く。その上で、習の例であるならば、本義は「誰

習也」、爾雅（釋詁）の「疇、孰、誰也」、即ち問うことばと説く。八上13b何の段注に「誰何孰三字皆問習（誰、何、孰の三字は皆て問う習）」とある。

(7) この字は知（五下25b）に同じという。

知は「習也」。③从口矢」であるが、③の説解下で白部の𠂔に拠つて「識習也」であるべきと知る。その識（三上12b）は「常也」とあるまゝにしておき訂しない説解を「意也」とすべきと段注で述べる。

(8) 儼（本来は「○行有節也（行いに節度がある）」に通じると段注はいう。追儼の様子は「論語」「鄉黨」「皇侃の『義疏』」「鄉人儼（口作儼儼之聲）」に見える。呪文を唱え、大声を発し杵で楯を打ち、特殊の弓と矢で疫である鬼を驅逐する。宮中行事としてわが国でも行われ、今日では節分の「鬼は外」として残る。鬼（疫）を退けるために「大きな音や声を出す」ことが重要なことであつたと察せられる。

(9) 筆者の以下の論考を参照されたい。

『說文解字』研究―段注に散見する方言・方俗・事物・事象についての一考察―資料編①江蘇―江蘇記載部分についての一考察―（『東京都立大学人文学報』198号 一九八八）、段注に散見する。今俗について―段注における俗語を考える―（『中国語学』235号 一九八八）（研究ノート）『說文解字注』に散見する俗語 資料編（2）（『お茶の水女子大学中国文学会報』7 一九八八）

(10) 以下は本小稿の目的でもなく、筆者が考究する段玉裁自身の文字説に直接かかわることではないが、段氏が整えたB類の説解から、清朝の劉淇が著した訓釈と用例を施した韻引き字書である『助字辨略』（二七一一年初版）の自叙でいう凡四百七十六字を分類した三十類が思われる。また段氏同門の王念孫の子である引之には『經傳釋詞』（四部分類では經部小書類訓詁之屬）という助詞に関する專著

がある。いま少し触れる所以である。

劉書では、助辭(字)とは虚辭(字)をいうようで段氏と重なる術語(表現)が多いことから、段氏当時の分類基準の基本性を想われる。楊樹達は「助字辨略跋」で「(助字とは虚字で)今の所謂語氣詞・関係詞などであるが、唯この書の辨けるところでは、偶々兼ねて副詞にも及ぶ」と述べ、更に双璧となる後出の王引之の書と比して「辨略」は訓釋と體例は或いは亂雜であることを嫌む。舊文を援いて根據とするが未だ必ずしも盡く其の初めに溯ったわけではない。引用した材料は元曲の助字で未收のものを除く外、經史子集、詩詞雜説は並べて皆な載取する。精審さは王氏の「釋詞」に及ばぬが、然し收羅めるものの豊富さと引用材料の廣範さのてんでは「釋詞」が未だ逮ばぬところである」という。

主要参考文献

- 段玉裁 六書音均表・周禮漢讀考・古文尚書撰異・詩經小學・毛詩故訓傳 定本小箋
- 狩野直喜 中国哲学史、特に東漢と清朝の条 (岩波書店 一九五三)
- 倉石武四郎 中国文学講話 (岩波新書 一九六八)
- 吉川幸次郎 仁齋・徂徠・宣長 (岩波書店 一九七五)・中国文学史 (岩波書店)
- 短長亭集、特にⅡ (筑摩書房 一九六四)
- 頼惟勤 説文入門 (一九八三)・中国古典を読むために (一九九六) (以上、大修館書店)
- 東京大学中国文学研究室編 中国の名著 (勁草書房 一九六二)
- 清 劉淇 助字辨略
- 王引之 經傳釋詞 (嘉慶三年二月一日高郵王引之敘)
- 近人 馮桂芬 説文解字段注攷正 (中文出版社 手稿本影印本)

楊樹達 助字辨略跋・詞詮・高等国文法 (総論)

楊伯峻 文言虚詞 (中華書局 一九六五)・古漢語虚詞 (中華書局 一九八〇)

三省堂『言語学大辞典 第6卷 術語編』特に p.723

国史大辞典・伊藤東涯・荻生徂徠・追儼 (吉川弘文館)

伊藤東涯 操觚字訣・荻生徂徠 説文筌蹄

『漢語文典叢書』吉川幸次郎・小島憲之・戸川芳郎 汲古書院

一九九八

(5) 操觚字訣・用字格・實字解 (3) 譯文筌蹄初編

平凡社 中国文学大系・詩経・孟子・春秋左氏傳・史記

貝塚茂樹 論語 (中公文庫 一九七五)